甦るべき明治 ～維新を支えた下絵の世界～

2016年春、2015年に完成した釈迦三尊像クローンの事業継続を果たすために鋳物製造パートナーだった高岡市の将来のクローン文化財製造拠点化を実現するために中小機構の支援を得て、伝統技術のさらなる現代化を目指すために過去の逸品の再現を試みることにした。高岡鋳物の最盛期は周知のように明治期にある。明治維新後近代日本の黎明期にあって数々の万博で日本工芸技術の代名詞となり、多くの逸品が輸出されたがそのために国内に残るものは少ない。その渦中、私たちは高岡市立博物館の資料室で思いもかけない資料を発見したのである。

それが、日本技術近代化の最初のイノベーション事業とも言える明治10年に行われた第一回内国勧業博覧会の際、産地からの要請で大久保利通、前島密、九鬼隆一らを中心とした明治新政府のメンバーが地方に産地の要請に応えて絵師たちを派遣して製作した銅器下絵の数々である。それは絵というよりもいわば設計図のようなものであり、様々な指定が書き込んであり、同時に絵画作品としても十分に価値を持つものであった。そこで二つのプロジェクトを企画した。一つは明治新政府が、おそらく島津斉彬など江戸末期に日本近代化を策した者達の遺志を受け継ぎ伝統技術を革新して国際的な品質とデザインを持つ逸品を作り上げ、不平等条約に左右されない日本の新しい経済基盤を作り上げようとしたことを今の人たちにレガシーとして展覧会を行うこと。

もう一つは現品がないが逸品であったに違いない作品を3D化し今に甦らそうという試みである。その過程の中で東京藝大に保存された技術も提供しながら過去の素晴らしい技術に通じ、しかも現代のテクノロジーをも操る新しい職人像を持つ人材育成を果たそうと考えたのである。レガシーとテクノロジーはヒューマンスケールに落とし込まれて初めて夢を見ることを許す。

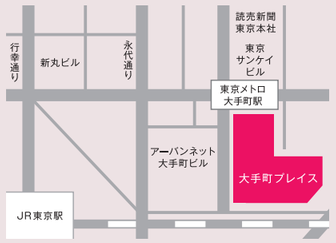
再現に取り組むこと2年、現在の産地においてはまだ外形しか現実化することができない。しかし、今回明治期の事業コアメンバーに関連する企業が多く参加する大手町プレイスにて下絵を展示するにあたってあえて、逸品と同時に展示することにした。それは明治の開拓者たちが味わったであろう、同じ産みの苦しみを共有したいからに他ならない。

伊東順二

東京藝術大学COI拠点文化外交・アートビジネスグループ特任教授。美術評論家。アート、音楽、建築、都市計画など分野を超えたプロデュースを多数手がける。1995年「ベニス・ビエンナーレ」日本館コミッショナー。2005年～13年富山大学教授。08年～12年「金屋町楽市」実行委員長。前長崎県美術館館長。パリ日本文化会館運営審議委員。富山市ガラス美術館名誉館長など。

主催　**東京藝大COI拠点文化外交・アートビジネスグループ**
協力　**高岡市、高岡市立博物館、伊東順二事務所**
協賛　**NTT都市開発株式会社**
企画、構成、演出　**伊東順二**（東京藝術大学社会連携センター 特任教授）
学芸協力　**高岡市立博物館**
監修
原田一敏（東京藝術大学社会連携センター 客員教授）
相原健作（東京藝術大学社会連携センター 特任研究員）
仁ヶ竹亮介（高岡市立博物館 主査学芸員）
空間デザイン
長谷川欣則（東京藝術大学社会連携センター教育研究助手）
再現下図制作
竹久万里子（東京藝術大学社会連携センター 特任助手）
制作協力　**池上留理子**（株式会社ジェクスト）

〈お問い合わせ〉
TEL 050-5525-2787（東京藝術大学社会連携センター）



甦るべき明治
～維新を支えた下絵の世界～

2019年
4月4日〈木〉～4月12日〈金〉
午前10時～午後7時

〈会場〉
大手町プレイス 2F カンファレスセンター前ロビー
東京都千代田区大手町2-3-1

観覧無料

花鳥文羂壺形花瓶下絵（金森家下絵）
（高岡市立博物館蔵）

発見！明治のデザインイノベーション！

今解き明かす明治の工芸革命

富山県高岡市の伝統的工芸品である高岡銅器の歴史は江戸初期の高岡開町とほぼ同時にはじまります。

はじめは生活必需品などの鉄鋳物を製造していましたが、江戸中期より銅器が作られます。しかし、銅器が産業として確立するのは幕末から明治期以降です。角羽勘左衛門や金森宗七ら先覚的な銅器問屋が横浜貿易に進出し、内外の博覧会に出品・受賞を重ね、高岡銅器の名声を高めていきました。その背景には常に国内外各地の好みのデザインや需要に対応する不断の努力がありました。

高岡銅器の作品は下絵を基にして作られました。下絵とは作品細部の技法・材質・色などの細かな指示が記された「設計図」で、なかには絵画作品として優れたものもあります。

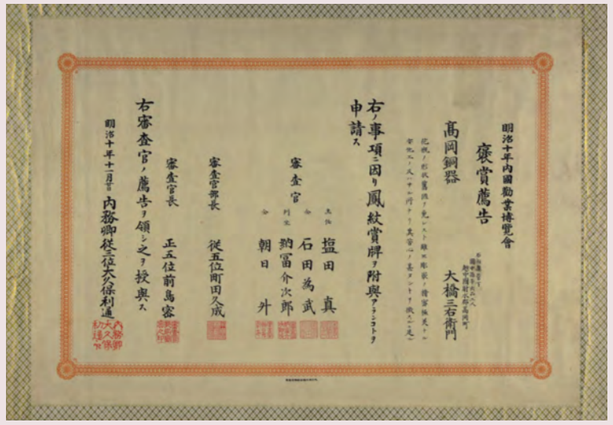
下絵ははじめ、絵師や問屋が描いていましたが、政府は殖産興業推進のため、明治8年から18年にかけて、万博や内国勧業博覧会に出品される全国の工芸図案を直接指導する「図案配布（貸与）制度」を実施しました。後にこの図案は『温知図録』として編纂されました。高岡でも金森宗七、角羽勘左衛門、横山弥左衛門、大橋三右衛門ら多くの銅器問屋がこの制度を活用しました。本展では下絵を多く所蔵する高岡市立博物館の下絵の内、主に明治政府の指導を受けた下絵類を展示します。

雲龍文図（大橋家下絵）

豆に蝸牛文花斛下絵（大橋家下絵）

牡丹文壺下絵（大橋家下絵）

古銅龍巻香炉下絵（大橋家下絵）



明治十年内国勧業博覧会褒賞薦告状（高岡市立博物館蔵）

花鳥文扁壺形花瓶下絵（金森家下絵）

室江吉兵衛《金銀銅象嵌芭蕉に猫文花器》（高岡市美術館蔵）

散朝顔文象嵌花瓶下絵（金森家下絵）

下絵は全て高岡市立博物館蔵